

「鬼の児」の実体

——金子光晴についての一考察——

陶 山 祐 二

序

鬼の児が生れた。産声をきかなかったか。

鬼の児が生れた。一から十まで気に入らぬげな産声を。

怖るべき批判と達識を養ふため、母の瘦乳を吸ひ、

つのあり、尾あるみどり児は

寝くたれてゐた。のんだくれのやうに。

鬼の児が生れた。近隣は瞠目し、

嘲り、のろひ、指さして

家の戸口にひしめき、並ぶ。

すでに風景は傾き、手ずれ、垢じみた思想によごれはて、

天には馬蠅がびっしりたかり。

季節は息苦しく、地は寝ぐさく、

日は蝕んで骨灰ふる亜鉛の屋根がつみ重なり、生涯ぬけられぬ貧困と

啞、聾、黄疽、中風どもがむらがり。

——「鬼の児誕生」——（「鬼の児の唄」）

第二次大戦も終りに近いある日、山梨県の山中湖のほとり、平野村に疎開していた金子光晴のところに、岡本潤が一人娘をつれてたずねていった。そこで、「鬼の児の唄」その他のノートを金子から見せられた岡本は、その時の感動を、次のように書いてある。

「ぼくは今さらのように舌をまいた。ふだんはとりとめのないことしかいわなないヒョウヒョウとした金子の真髓にふれる思いがした。あの言語道断の暗黒盲目の時代に、日本の一人の詩人によってこういう詩が書かれていたということは、まさに驚異といわなければならぬ。」（「鬼の児の唄」跋）

なぜ岡本は「舌をまいた」のか。ある国がまちがった方向に走って行くとき、良心的な詩人が、その国の政治に協力しないのは

あたりまえではないか。もし、そのような詩を発表することができないならば、かれはひそかに、自分だけの詩を書きつづけるだろう。いずれにしても「詩人」という名に値するほどの人間ならば、自分の心を裏切つてまで、権力に協力するはずはない。それにもかかわらず、非協力の詩を書きつづけるということが例外的なことであり、「驚異」にあたいするところに、その時代の異常性を見ることができるといえよう。

もちろん、多くの知識人たちは、気分としては、戦争に反対した。だが、事実として、かれらは協力した。そうせずにはおかない事情が、存在したのだ。そのような状況の中で、ただひとり反対しつづけることは、ほとんど不可能なことだった。それでは、その不可能なことを最後までやりとおした金子光晴とは、どんな男か。なぜ、どのようにして、それをやりとおすことができたのか。このことをあきらかにするのが、この試論の第一の目標である。それは、過去の解釈であるとともに、ある状況におかれた時の人間の能力をみきわめる上にも、興味ある問題である。

金子光晴は、詩人であるより前に、ひとりの人間である。だが、それとともに、かれは詩人である。すくなくとも、かれが人間であることを証明するのは、その詩作品である。したがって、光晴のアリバイをたしかめるためには、まずその詩作品そのものを見なければならぬ。この試論の目標のひとつがそこにおかれるのは、当然であらう。

以上のような意味において、これは詩人論であるともいえるし、作品論であるともいえる。じっさいは、そのいずれでもないし、いずれでもある。なぜなら、詩人の主体性のない作品も、作品のない

詩人も、どちらも考えることができなからである。

ここでは、まず、この特異な詩人が権力に反抗した理由および方法を究明し、ついで、その作品の特質にまで、考えを進める予定である。

第一章 なぜ協力しなかつたのか

一 光晴の抵抗の特殊性

僕、僕がいま、ほんとうに寂しがつてゐる寂しさは、この零落の方向とは反対に、ひとりふみとゞまつて、寂しさの根元をがっきとつきとめようとして、世界といっしょに歩いてゐるたった一人の意欲も僕のまはりに感じられない、そのことだ。そのことだけなのだ。

——「寂しさの歌」より——（「落下傘」）

金子光晴は、ただひとり、戦争反対の詩をかきつづけた。これだけでなく、たいへんなことだ。しかし、かれの特殊性は、抵抗したところではなく、その抵抗の目的、あるいはその理由にあるのだ。

フランスの詩人たちの一派は、命をかけて、侵略者と裏切り者に抵抗した。かれらの詩は、こっそりと人々の口から耳へ伝わってゆき、うちひしがれた人々をたちあがらせて、悪魔の手から祖国を解放するたたかひの、ひとつの原動力になった。しかし、日本には、アラゴンもエリュアールもあらわれなかつた。日本の詩人たちに、勇気がなかつたのだろうか。

フランスにおいても、日本とおなじく、たたかひは絶望的なすが

たを示していた。サルトルはいう。

「逃亡、監禁、とくに、幸福な時代のときに巧みに仮面をつけられる死、われわれはそれらをわれわれの気がかりの永久の対象となしていた。それらが、避け得る事故でもなく、不断に襲ってはいらぬが外部にある脅迫でさえもないことを、われわれは学んでいた。そこに、われわれの配当を、われわれの宿命を、われわれ人間としての現実の深い根源を、見なければならなかった。一秒一秒、われわれは、『人間はみな死ぬものだ』という、このささやかな、ありふれた句の意味を、あますところなく、生きていた。……じつに敵の残忍さそのものが、平和のときには避けているような疑問を自己に提出することをわれわれに強制して、われわれをわれわれの条件の極端なところにまで追いつめていた。われわれのうちで、——いかなるフランス人が、かつて或いは別なときに、こうした場合に陥らなかつただろうか？——抵抗に関係するいくつかの細部をよく知っている者はすべて、『もし自分が拷問されたら、自分は堪え忍ぶだろうか？』と、苦悩を以て自問していた。①」

しかし、それにもかかわらず、かれらには希望があり、ほこりさえもあつた。なぜなら、侵略者と裏切者は、いつかはとり除かれるべき不正であり、正義と祖国をまもりぬくことは、かれらの使命であつたからである。その上、かれらには「組織」があつた。たとえ、その組織が貧弱に見えたにしても、それが存在するということは、かれらの良心に対するはげましであり、未来の可能性に対する自信をうらづけるものであつた。

であつた。まして、抵抗の組織などは存在しなかつた。祖国を解放するためにたたかう必要もなかつた。なぜなら、この国土のなかには、侵略者などはいなかつたからである。同じ抵抗といっても、フランスと日本とは、その状況にこのようなちがひがあることを、考えなければいけない。

日本でも、すぐれたコミュニストたちは、最後まで抵抗した。かれらは、眠っている間もおそいかかってくる内外の圧迫や誘惑とたたかいぬき、ほとんど絶望的に見えた状況に、さいごまで屈服しなかつた。そのために身をほろぼした人々も少なくない。だが、はた目にはたとえ絶望的にみえようとも、かれらの心の中には、未来に対するゆるがない確信があつた。いうまでもなく、それは、かれらの世界観にもとづくものである。

一部の宗教家たちも抵抗した。戦争が正義の道とされた当時であつて、逆にそれを罪惡とみるかれらの立場が、みとめられるはずがない。だが、神の心を知っていると信ずる者にとって、現実の圧迫など、問題にならない。かれらには、殉教社のほこりさえあつたであらう。

カミュは言っている。「どんな価値でも反抗を惹き起すものではないが、すべての反抗的行動は、暗黙裡に、ある価値を求めている。少くとも、ある価値に関連している。②」いままで見てきた抵抗者たち、祖国解放のために戦つたフランス人たち、日本のコミュニストや宗教家たちは、それぞれ、かれらの価値、すなわち輝やかしい未来に対する確信にもとづいてたたかいつづけた。じじつ、幸福な未来を信ずる人にとっては、現代の一时的な苦痛をたえしのぶこととは、それほどむずかしいことではない。結核患者は、それによつ

て病気がなおると考えるからこそ、切開手術に同意するのである。
しかし、金子光晴はフランス人でも日本のコミュニストでもない。
い。おそらく、熱心な宗教家でもないであろう。それではどんな未
来を信じて抵抗しつづけたのか。それよりも、あの暗黒の中で、かれ
は何らかの未来、かれの抵抗が正當に評価されるような未来を信
じていたのだろうか。つぎのような詩を讀むと、わたしには、この
ことが非常に疑わしく思われるのだ。

蜆の歌

蜆が蜆をうみ

灰ばんだ海は

ぬか袋のやうにふくらむ。

蜆がらが

蜆がらに、

かぎりなく重なる

ざくざくな道。

空は、その小さな殻がひらく

まつしげな靑色。

あゝ、なんといふもの淋しげなけしきだ――。

さしくる潮は殻のうへをわたり

しうんと湖水は吸はれ

はかなくのこる泡、泡、泡

なんといふむなしそのくり返し。

竹とんぼは落ち、

一国の虚榮は

老薇薔色の重油とともに

漂流し去った、

だが、蜆どもはこのこる。

蜆が、蜆をうみ

はてもしらず。

夜のこと

泥のなかの蜆は

二枚の貝をひらいて

きうと泣く。

ねむさうな目をして

月は、

泥とあそぶ。

(「鬼の尻の唄」)

人類がほろびてしまったのちの、白い、むなし地球の風景である。金子光晴が信じていた未来とは、こんなものなのだろうか。だが、人間がいなくなる世界を「未来」と呼んだところで、そのことばになんの意味があろう。そのような未来を信じて抵抗しつづけるなどということは、考えることさえできない。なぜなら、そのばあ

い、抵抗してもしなくても、おなじことだからだ。

それでは、金子光晴は、何によって抵抗したのだろうか。このことをあきらかにするのが、この章の目標である。

注

① 白井健三郎訳「アメリカ論」（人文書院、一九五三）P・86
87。

② 佐藤朔、白井浩司訳「反抗的人間」（新潮社、一九五八）P・
15～16。

二 アミノジャク

鼻先があをくなるほどなまぐさい、やつらの群集におされつつ、
いつも、

おいらは、反対の方角をおもつてゐた。

——「おっとせい」より——（「鮫」）

金子光晴を語る人がよく口にするのは、かれが「アミノジャク」
だということである。たしかに、これは、かれの特徴をあらわすこ
とばである。これもよくひきあいに出される詩に、つぎのようなも
のがある。

反 対

僕は少年の頃

学校に反対だった。

僕は、いままた

働くことに反対だ。

僕は第一、健康とか

正義とかが大きなひなのだ。

健康で正しいほど

人間を無情にするものはない。

むろん、やまと魂は反対だ。

義理人情もへどが出る。

いつの政府にも反対であり、

文壇画壇にも尻をむけてゐる。

なにしに生れてきたと問はるれば、

躊躇なく答へよう。反対しにと。

僕は、東にゐるときは、

西にゆきたいと思ひ、

きものは左前、靴は右左、

袴はうしろ前、馬には尻をむいて乗る。

人のいやがるものこそ、僕の好物。

とりわけ嫌いは、氣の揃ふといふことだ。

僕は信じる。反対こそ、人生で

唯一つ立派なことだ。

反対こそ、生きてることだ。

反対こそ、じぶんをつかむことだ。

(「赤土の家」)

これは第二次世界大戦が終るより二七年以上まえの詩であり、「皎」が出版された時からでも、二〇年も前の詩である。しかし、かれの底にあるこのような傾向は、第二次大戦中も、戦後の今日でも、かわらずにつづいていよう。かれじしん、その自伝の中で、つぎのように書いています。

「性来の天の邪鬼から、墓穴をじぶんで掘る仕儀に追込まれる結果になり易かった。軽佻な、無意味な反意である。①」

それでは、どのようにして、この「アマノジャク」は形成されたのだろうか。

心理学者たちの説くところによると、人間の性格は、幼時に決定されるという。公式的決定論には、わたしは同意できないが、しかし、幼少時代の環境が、その人の一生に大きな影響を与えることは、みとめざるをえない。その環境のうちで、第一に問題になるのが、家庭である。

大鹿という家で生まれた光晴は、三才満二才の時、金子家にもらわれていった。かれが「もらわれっ子だ」ということを明確に自覚した時期はあきらかでないが、おそらく、そんなにおそくはないだろう。この時以来、かれは、普通とはちがった子供になる。急に、両親がかれを「のけもの」にしていることに気がつく②。おまけに、義父母の家庭は、そのような意識をやらわらげるよりは、つよめること

に役立ったのだ。

第二に考えなければいけないのは、その時代の社会環境である。

かれは一八九五年一月二五日に生まれた。ひとりの詩人が、幼年期から青年期にかけてすごした期間は、ちやうど、日本の資本主義が、興隆から完成にいたる期間と一致する。それは、世界一流の帝国主義と、中世的封建国家とが、矛盾したままて共存し、表面の繁栄が、慢性的貧困に裏づけられていた時期であった。このような時代にあって、「武士は食わねど高ようじ」というあの気風、貧弱な内容をおおいかくすために形式だけを誇示しようとするあの虚栄心が、ふたたび、中間層の人々の心を支配した。それはそのまま、世界に対する、当時の日本のすがたの反映でもあったのだ。このような傾向は、当然、人格を形成しつづけた金子光晴をとりかこむ人々にも、影響を与えた。その上、養母は、武士の家庭に育った人だった。光晴は書いています。

「武士の家庭の空気がというものは、今日想像するような几帳面で、ノーマルな感じのものではなく、厳格なしつけ、そのものが、歪んで、破綻にみちて、実質のない誇りと、世間から受ける不当なあしらいのために非常識な、危険な性格をつくり出し、それが、なんとはなしに一触即発底の雰囲気をかもし出している。養母の性格にもそういう小心な、おちつきなきと、世間から遊離した、白痴的なおっとりさが同居していた。③」

金子光晴は、まず家庭の子であり、同時に、時代の子であった。そして、その家庭は、その時代の縮図であった。かれじしん、そのことを自覚して、つぎのようにいう。

「僕の周囲から影響されたものは、均等のとれないあの時代の精

神であつて、義父も、義母も、その他の人々も、成長をゆがめられ
た個々の犠牲者にすぎなかつたのだ。④」

「もともと、もらわれっ子であり、親たちの気まぐれの御相伴で、
赤ん坊のときから、ちやほや祭りあげられたり、忘れたように放任
されたりして、感情をもてあそばされたために、極端な得意と、
奈落の淋しさを味わされ、感じやすい少年になっていたうえ、日清
戦争にうまれ、日露戦争を小学校の時に、さらに中学時代に第一次
欧州大戦を経験したということは、その過剰な刺激のため、感性の
ささくれ立った子供を、異常性格にするに充分な条件であつたかも
しれない。⑥」

このような時代に対して、光晴は、うまく適応して生きてゆくこ
とができたであろうか。だが、かれの精神はあまりにもがん固す
ぎ、かれの感受性はあまりにもすぎて、傷つきやすかつた。
さらにわるいことには、かれの育つた家庭そのものが、時代に対す
る適応性に欠けていたことである。

少年から青年にかけての金子光晴は、二重の意味での「のけも
の」だつた。第一に家庭からの。第二に時代からの。

もちろん、この少年は、そのような状態をよくするために、努力
したにちがいない。だが、それはむだなことだ。かれが「のけも
の」でなくなりたいと思ふことじたい、「のけもの」であることを
意識することだからだ。「おれはもらわれっ子」という意識がな
くならないかぎり、これはどうすることもできない。あがけばあが
くほど、ますます深みにすべりこむだけである。

ここで、ひとつの回心がおこなわれる。
「ぼくは泥棒になるんだ」

一〇才から一五才のあいだに、ジャン・ジュネはこのように決意
する⑥。二三才から二七、八才までの間に、金子光晴はつぎのよう
に決意する。

「つまらない人間になってみよう⑦。」

このことばは、「のけものになってやるう」といいかえても、同
じことである。そして、この回心は、かれがそれを意識するより一
〇年以上もまえ、すでにおこなわれはじめていたとみて、さしつか
えあるまい。それだからかれは、旧時代の遺物が多分に残ってい
る家庭に対して、反撥したので。

「僕の住んでいる世界は、カピと、しみと、時代のふるびと、手
垢と、伝統で底光りするものばかりで、重苦しくて息もつかなか
つた。……物心ついてから僕は、そういう古い習俗や、生活感情に、
魔の淵にひき入れられるような嫌悪を抱きはじめてた。⑧」

だが、家庭の「のけもの」になることは、比較的簡単であつた。
それは、その家庭じしん、時代からの「のけもの」であつたから
だ。むずかしいのは、その家庭をもつつみ込んでいる時代から、
「のけもの」になることである。

そこで、かれがひとつのたよとしたのが、「西洋」である。フ
ランス人が経営する暁星中学にはいることをぞんだのも、そのた
めである。

「少年時代の心の闇黒のなかで、僕の『西洋』と『日本』がせめ
ぎあつた。⑨」

「そういうもの(旧時代的なもの)から僕を反撥させたものは『西
洋』だつた。⑩」

このようにして、かれは、その家庭と、それをつつむ旧時代の空

氣とに反抗した。だが、これだけでは問題はかたづかない。なぜなら、大きな目でみれば、かれがその中に育った時代そのものが、「西洋と日本がせめぎあう」時代だったからである。そして、かれがめざしたのは、たんに旧時代的なものだけでなく、それさえも矛盾するひとつの要素となつていくにすぎない、あの虚栄の空気に、要するに、かれをうけいれることを拒むすべての環境から、「のけもの」になることだった。

このような子供の反抗には、かならず「みせかけ」がともなう。かれが「ほかの子供とはちがった子供」であり、「のけもの」になることを決意するとき、それを裏づけるためには「まともな人々」に対して、誇張された異常な行爲を見せつけることによつて、そのちがいを強調しなければならぬ。かれの自伝をよむ人は、少年の光晴が、そのような「みせかけ」の行爲のために、いかに苦心したかを知るのである。京都から東京の小学校に転校した当時（一〇才）、新参者を「のけもの」にする級友たちに、いろいろめずらしいものを配つてかれらを驚かせたのも、それらの品物を手にいれようとして、勤工場で万引きしたのもそのためである。また、一二才のとき、友だち二人とアメリカへ渡ろうとして家出したのも、その動機のひとつは、このことにあるだろう。そして、この少年の奇行は、すべて、複數の中でおこなわれた。それこそ、かれの行爲が、他者に対する「みせかけ」であつた証拠である。「のけもの」になることを決意した少年がそれを示すために、かれを「のけもの」にする人々を必要とするのは、当然のことだから。

金子光晴は、自分の存在を意識したとき、すでに家庭と時代からの「のけもの」であつた。そこで今度は、かれがすすんで「のけも

の」になることによつて、まわりの人々に反抗しようとした。そのためにもえらんだのが、「みせかけ」の行爲である。だが、これは、どんな効果をもたらしただろうか。

「みせかけ」とは、いうまでもなく、他者に対するみせかけである。したがつて、かれは異常性を強調することによつて、人目をひきつけなければいけない。ところで、人に注視させるのも、そのような注視を感じるのも、ともにかれじしんである。そして、それを感じることはないならば、かれが「みせかけ」という手段にうったえた意味はない。けっきょく、かれは、「人々に見られている」と自分が感じるために、自分のすがたを他者にむかつて投げかけるのである。だから、他者に対するみせかけというのは、正確でない。ほんとうは、「みせかけ」とは、自分じしんに対する、自分のすがたのみせかけである。この意味で、みせかけの純粹な形は、鏡の中の自分を見つめる孤独者である。

これによつて、反抗の目的が達せられるだろうか。もちろん、その一部は達せられる。なぜなら、人々は、ある程度かれの異常性をみとめるからである。だが、それだからどうだといふのか。もともと、かれは「のけもの」であり、「異常」なではなかつたか。それをみとめる人がふえたからといって、たいした変化があるわけではない。その上、得るものよりも失なうものの方がはるかに大きい。「みせかけ」による反抗とは、けっきょく、反抗する主体を否定することにほかならないからである。鏡の中の自分に、おもちのピストルをむける子供は、やがてつかれはてうしろを向くか、鏡をこわしてしまふかである。いずれにしても、もはや反抗すべきものは残らない。残るのは、むなしき努力のあとのかかと、や

せぬ絶望だけである。そうかといって、反抗をやめるわけにも
いかない。それをやめれば、かれを「のけもの」にする状況を肯定
し、さらに、かれの存在が無視されることにも、甘んじることにな
る。そして、この少年が何よりもおそれるのは、「無視される」こ
となのだ。

要するに、かれは、「のけもの」であることを拒んだ。それと同
時に、かれを「のけもの」にする、まともな人々と同化することを
も拒んだ。そのために、かれはすすんで「のけもの」になろうとし
た。だが、次の瞬間、そのように努力するかれじしんは、ふたたび
否定されねばならない。なぜなら、自分じしんをのけものにしよう
とするかれの意識は、はじめからかれを「のけもの」にしようとし
る他者と同化することになり、「のけものになつてやろう」という
意図が消えてしまうからである。かくして、かれは、永遠の否定、
目的のない、反抗のための反抗をえらんだのだ。それが、たとえ
無益な努力であり、何ものももたらさないとしても、それをやめる
こともできなかったのである。のけもの↓「のけもの」とみせかけ
ることによる反抗↓「のけもの」にする人々との同化↓同化の否定
↓反抗、この悪循環こそ、少年期から青年期にかけての金子光晴の
すがたである。

このようにして、次の詩句が生れたのだ。

なにしに生れてきたと問はるれば、
躊躇なく答へよう。反対しにと。

ところで、これが詩の中のことばであることは重要である。この
反抗者は、一九一四年（一九才）ごろから、詩を書きはじめたの
だ。もちろん、詩も「みせかけ」のひとつであるにはちがいない。
だが、単なる「みせかけ」がなにももたらさないので対して、
詩は、あきらかな「創造」である。その上、それには、自分の心と
人の心を動かすだけの力がある。ある意味において、反抗するもの
にとつてこれほどよい武器（手段）はない。もつとも、かれが詩を
書きはじめたから、ただちに泥沼からすくわれたというのには、あや
まりである。むしろそのために、一時的にはますます深みにおちこ
んで、じたばたしなければならなかっただろう。それに、「詩によ
ってすくわれる」というのは、正しくない。人に絶望を自覚させる
詩もあるからだ。しかし、すくなくとも、それ以前には「みせか
け」による反抗しかおこなうことができなかったものが詩を書きは
じめたばあい、それは、おそかれ早かれ、かれの反抗の方法に決定
的な変革を与えないではおかないだろう。このことについては、ず
っとのちに、くわしく考えることになるだろう。

ともあれ、金子光晴の「大勢に逆らうという損な性質⑩」、つま
り、アマノジャクは、このようにして形成され、天性といつてもい
いほどになって、現在までもつづいている。「白樺派」の青年たち
に反撥を感じたのもそのためである。のちになって、プロレタリア
文学運動にも、シュルレアリストの仲間にもはいることをしなか
ったのは、けっきょく、それらが時代を支配する傾向であり、かれ
をひきつけ、同化してしまっただけの力をもつていたからなのだ。⑩。
また、第二次大戦中、日本人の心をわきたさせたあの熱狂に背をむ
けたのもそのためだった。とりわけそれは、俗衆の嫌悪となつてあ

らわれる。

そいつら。俗家といふやつら。

ヴォルテールを国外に追ひ、フリーゴ・グロチウスを獄にたたき

こんだのは、

やつらなのだ。

パタビアから、リスボンまで、地球を、芥^{ほこり}垢と、饒舌^{おしゃべり}で、かきまはしてゐるのもやつらなのだ。

——「おっとせい」より——

アマノジャクは、たしかに金子光晴の大きな特徴であり、それが、第二次大戦中のあの孤独な抵抗のささえとなったことは、いまさらいうまでもない。徴兵検査に失格させるために、息子を松葉いぶしにした事件について、かれは次のように書く。

「それは、ただ、肉親愛のエゴイズムとだけは言えない僕らの気持だった。戦争に対して、もう一銭も支払いたくないというのが本心で、その他に、どこまでこちらの主意を押し通せるかという競争もあった。強権に逆らうということが、善意に拘らず、スリルを伴った、スポルチイフな愉^{たのしみ}楽となつていったのは、アブノーマルな傾向といえは、そうかもしれない。……たしかに、痛快だったし、人しれぬ満足があった。そういう天の邪鬼は、青年時代から持っていたもので、所謂世間の道徳や、習慣に逆らううつぼつとした感情から、僕の生涯の歪み、軌道に外れたコースがはじまっていた⑤。」

だが、アマノジャクとは、けつきよく、気分の問題にすぎない。あの戦争において、たまたま、国をあげて一つの方向に流れたから、かれはそれに抵抗したのだ。もし逆の場合だったら、つまり、国民がみな戦争に反対していたら、かれは、民衆を戦争にむかつてむちうつファシストになつていたかもしれない。また、こういう見かたもなりたつだろう。国際連盟を脱退し、列強の勧告を無視して満洲を侵略した日本の指導者の行為そのものが、世界に対する、あるいは歴史に対する、アマノジャクだった。したがって、金子光晴は、自分の傾向を国の政策と一致させることもできたはずである。もちろん、こういう仮定はばかばかしい。これでは、金子光晴は、氣まぐれな「へんくつ」にすぎないことになる。

金子光晴の抵抗を考へるばあ、アマノジャクは、みのがすことのできない要素である。だが、すべてをそれでわりきるのはあやまつている。要するに、これは、決定的な要素とはいえない。

(未完)

注

① 金子光晴「詩人」(平凡社、一九五七)P・132

② これは、二重の意味で、言えることである。第一に、ほんとうの両親が、かれをよその家へくわてやったということにおいて。

第二に、養父母が、かれにほんとうの愛情を抱くはずがないと考へることによつて。

③ 「詩人」P・10

④ 同書P・69

⑤ 同書P・12

⑥ サルトル「殉教と反抗」I、白井浩司、平井啓之訳（新潮社、九五八）P・60～61、参照。

⑦ 「詩人」P・145

⑧ 同書P・30

⑨ 同書P・31

⑩ 同書P・30～31

⑪ どちらほうになることを決意したジャン・ジュネについても、おなじことが言える。したがって、この箇所の記事は、サルトルの著書から、多くの示唆を受けている。（「殉教と反抗」参照）

⑫ 「すべてが目的のない行動だった。」（「詩人」P・67）

⑬ 「詩人」P・76

⑭ 「目の仇にするということは、それだけ手元にふみ込まれて、脅威を感じているということだった。」（「詩人」P・75～76）

⑮ 「詩人」P・210～211

（山口県立徳山商工高等学校教諭）